津島遺跡を探る 2

～岡山県陸上競技場改修に伴う発掘調査の記録～

2001

岡山県教育委員会

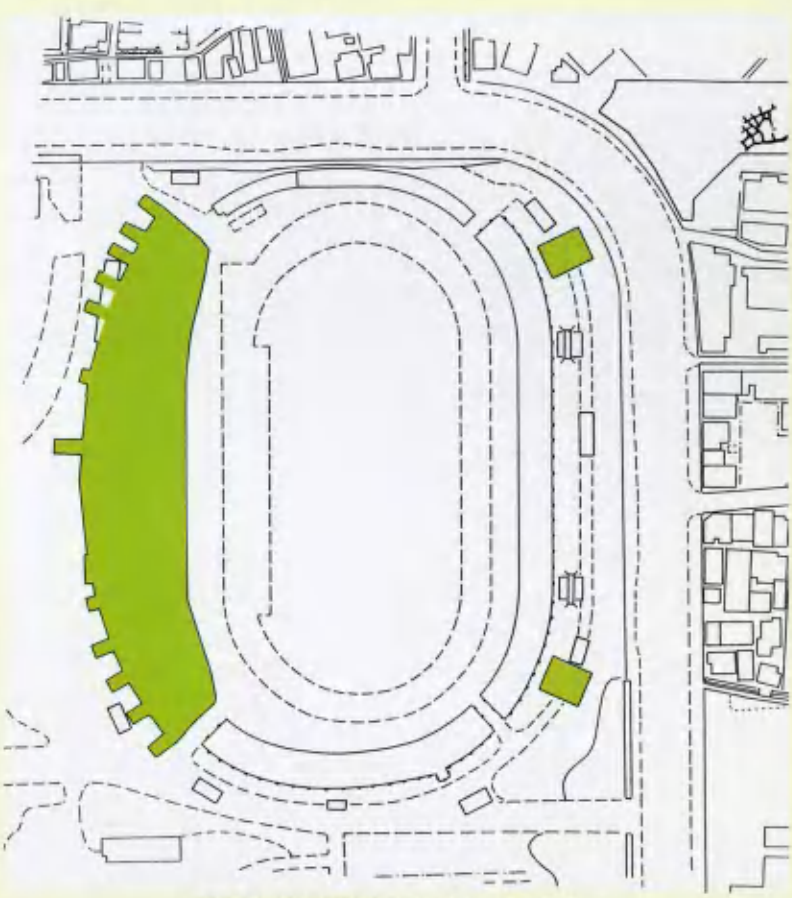
はじめに

津島遺跡は、岡山平野のほぼ中央部にあたる岡山市いずみ町の岡山県総合グラウンドを中心とした地域一帯に存在し、古くから知られていました。

津島遺跡を有名にしたのは昭和４３（１９６８）年の武道館事件をきっかけとした発掘調査ですが、これによって遺跡の実態が明らかとなりました。

縄文時代晩期から近世にかけての多くの遺構・遺物の発見から、長い期間にわたる人々の定住の確認もさることながら、特に弥生時代前期段階における集落と水田の発見は、その当時の農耕社会の在り方を知る上で最も重要な遺跡と評価され、昭和４６年には一部が国の史跡に指定されました。

この度、平成１７（２００５）年開催の岡山国体の主会場改修に伴って岡山県陸上競技場のメインスタンド・照明塔部分の発掘調査を平成１２年１月から１２月まで実施しました。この結果、弥生時代前期から近世にかけての多くの遺構・遺物が出土しました。この調査の状況と成果の一部をより多くの人に知っていただくため、写真を中心にここに収めました。



調査区位置図（1／2,500）

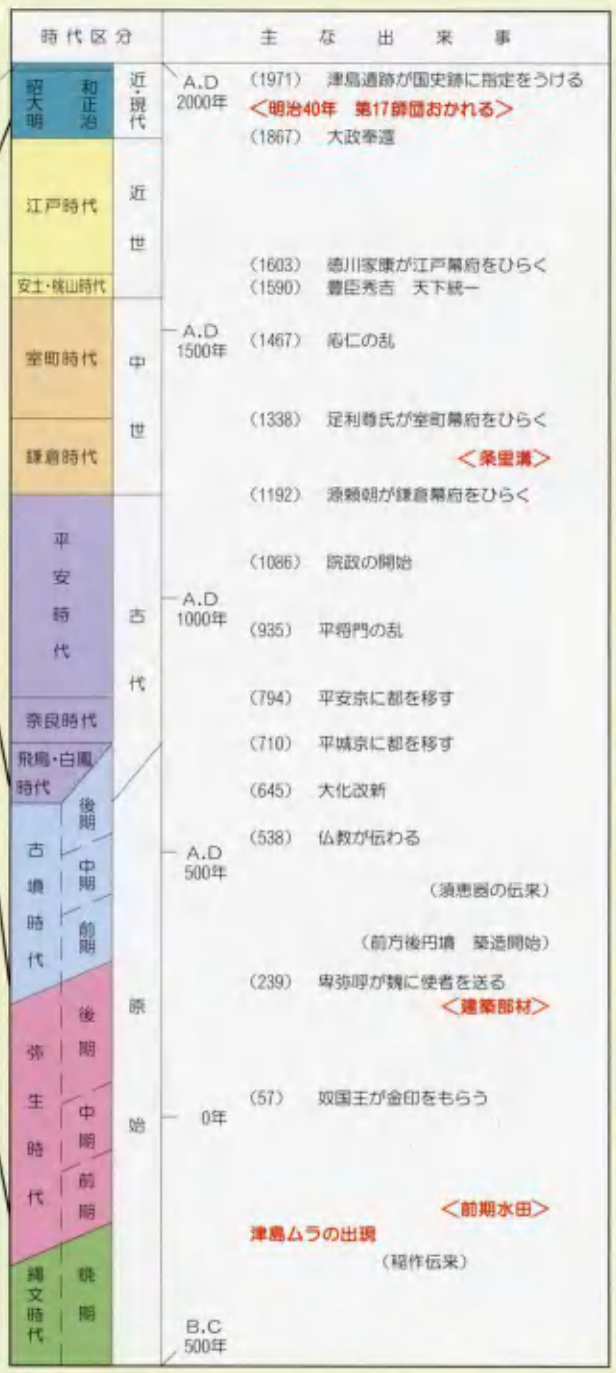
目　次

■津島遺跡の土層 …… 2
■津島遺跡と周辺の遺跡 …… 3
■発掘調査の記録 …… 5
■津島遺跡を記録する …… 9
■遺跡の公開 …… 10
■弥生時代前期 …… 11
■弥生時代中期 …… 13
■弥生時代後期 …… 15
■古墳時代 …… 23
■古代～近世 …… 27
■整理 …… 28

津島遺跡の土層

土層の断面を観察することで、津島地域が旭川から流されてきた土砂によってつくられた岡山平野の中にあって、その時々の状況によってどのような自然環境であったか、どのように土地利用がなされていたかがわかります。

津島遺跡の場合、地盤が安定するのは縄文時代晩期以降と考えられ、弥生時代前期には海抜１．７m前後において水田が営まれていました。また、その上層約５０ｃmには弥生時代後期から古墳時代にかけての竪穴住居（家）などが数多く検出され、ムラの存在が明らかとなりました。ただし、見つかった遺構の残り具合からは当時の生活面は後世の土地造成によって既に削り取られたことがわかります。当時の地表面はおそらく遺構検出面からさらに約１m高かったものと考えられます。最上層には、真砂土の厚い堆積が認められます。これは明治４０（１９０７）年に京山付近からもってきた土で、この一帯が旧日本陸軍の練兵場として造成されたことを物語るものです。

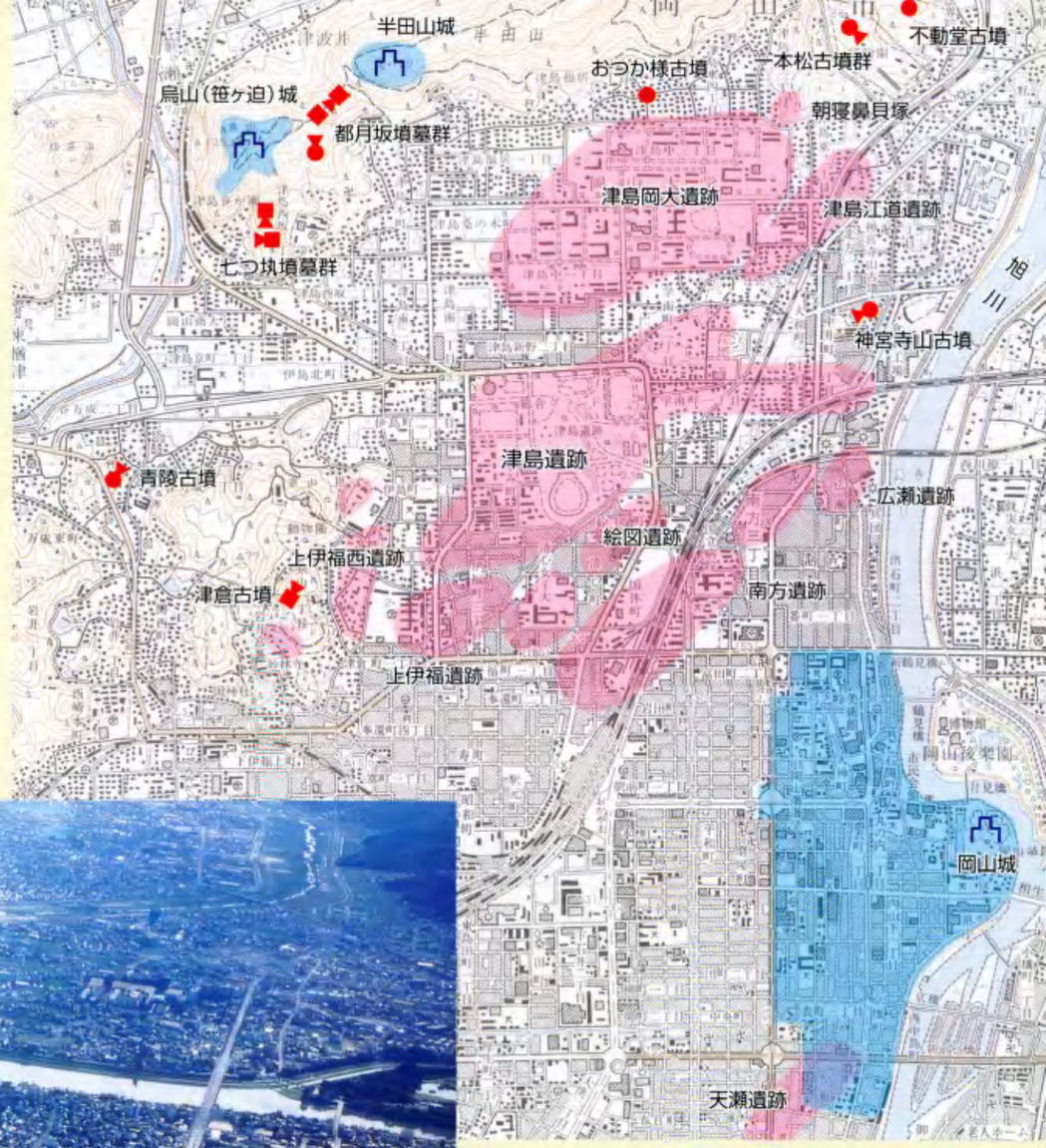


津島遺跡と周辺の遺跡

津島遺跡は、地理的には岡山平野に位置しています。縄文時代にはまだ、小さな川が網の目のように流れ、その合間を縫うように島状に高く土がたまった部分（微高地）に点々とムラを営んでいたようです。津島遺跡で本格的に人々が生活を始めたのは弥生時代前期（約２２００～２３００年前）のことです。津島遺跡では縄文時代晩期（約２３００～２５００年前）の土器が出土していますが、北にある津島岡大遺跡では縄文時代後期の焚き火、貯蔵穴の跡が見つかるなど、周辺上流域では一足早く人が住み始めていたようです。

時間と共に河川も埋まって平野が広く安定し、また農耕や土木技術などの向上によってムラは発展し、岡山平野一帯で弥生時代の遺跡が見られるようになります。さらに古墳時代にかけては周辺の山上に墳丘墓や古墳といった特別な墓が築かれます。これらの墓の主が、津島遺跡を含む平野一帯を治めていた人と考えられます。

古代には備前国御野郡となります。津島江道遺跡では役所の一部が発掘されており、この辺りが当時の中心的な場所であったようです。中世以降は大部分が田んぼとして利用され、近世には岡山藩の主要な米どころとなります。明治４０年には旧日本陸軍練兵場がおかれ、現在では岡山県総合グラウンドとして憩いの場を提供しています。



ムラ　城　墳丘墓・古墳

●津島遺跡周辺の主な遺跡（１／25,000）

（国土地理院平成１０年発行「岡山南部」「岡山北部」改変）

●旭川西岸にひろがる平野

（南西から津島グラウンドをのぞむ）

（写真：山陽新聞社提供）

発掘調査の記録

現在私たちが暮らしている地面の下には、昔の人々が暮らしていた家などの跡（遺構）や使っていた土器や石器などの道具（遺物）が埋もれていることを知っていますか？

発掘調査では、このような遺構や遺物を掘り出していきます。これを詳しく調べることで昔の人々がどのような生活をしていたのかがわかってくるのです。

■調査前の様子

調査する前は陸上競技場のメインスタンドがありました。この下に、遺構や遺物が埋まっていました。写真はすでに北側スタンドが取り除かれ、整地された状況です。

■表土を取り除く

調査の対象となる土層まで土砂が厚く堆積している場合、ショベルカーなどの機械を使用して丁寧に掘り下げます。

■準備をする

調査に入る前にまずは、条件整備から始めます。調査現場の安全対策や遺跡を保護するためのシートの準備や排水用の溝の掘削をおこないます。

■遺構を探す

準備が整えば、いよいよ遺跡の調査です。まずは地面を平坦に削っていきます。きれいに削ると、家や井戸などに埋まった土は周囲の土の色とは違うので、輪郭がハッキリと見えてきます。

■遺構を掘る

遺構が見つかったら、土層観察用の土手を残し、徐々に埋まった土だけを丁寧に掘っていきます。すると、住居などが姿を現わします。ここでは四角形の家が現れました。柱を埋めた穴はとても深いため、這って掘らなければなりませんでした。

■発掘作業

広い範囲を調査しているので、「遺構を掘る」「写真を撮る」「実測をする」などの作業が同時進行で行われています。

■柱穴

柱を埋めた穴などは移植ゴテなどの小さい道具を使って掘っていきます。

■土層観察

土の層の観察はとても重要なので、それが終わらないと掘りきることができません。

■土壙

穴の中にはたくさんの土器が入れられていました。

■作業分担

このような深い溝も人の手で掘っていきます。作業の内容によっては細かな仕事が要求されます。

■検討

土の色の違いは微妙です。土層の平面と断面をよく観察しながらいかに掘るか、考えながら掘り進めます。

■掘り下げ・排土

掘った土は、ベルトコンベアーを使って調査区外に出します。

■精査

特に重要な遺物は、竹ベラなどを使って慎重に掘り出していきます。

■木製品の調査

外気に触れると木製品は乾燥しもろくなるので、特に注意が必要です。

■取り上げ

足の踏み場もないほどたくさんの遺物が出ました。

津島遺跡を記録する

発掘調査は、ただ掘るだけではありません。遺構や遺物の形や出土した状況を写真に撮り、下の図のような実測図を描くなど克明な記録を取ります。

このようにして遺跡は「記録保存」されるのです。そしてこの記録は後に報告書として刊行され、多くの人の目にふれることができるのです。

●清掃

■測量

最近では、コンピューター内蔵の精密機械を使って、より速く正確な実測を行います。

●写真を撮る

●実測

●機械を使った実測

●実測図
（スケール＝1／10）

1点、1点測っていきます。

遺跡の公開

発掘調査で出土した遺構・遺物はできるだけ多くの人に見てもらうことが大切です。これによって、現在の人達が昔の人々の暮らし方などを知ることができるのです。

■検討委員会による視察

岡山県内の考古学研究者からなる「津島遺跡検討委員会」から発掘調査に対していろいろな意見をいただきます。

■現地説明会

発掘の途中、津島遺跡のことをできるだけ多くの人に知ってもらうために説明会を開きます。調査担当者が出土した遺構・遺物について説明します。

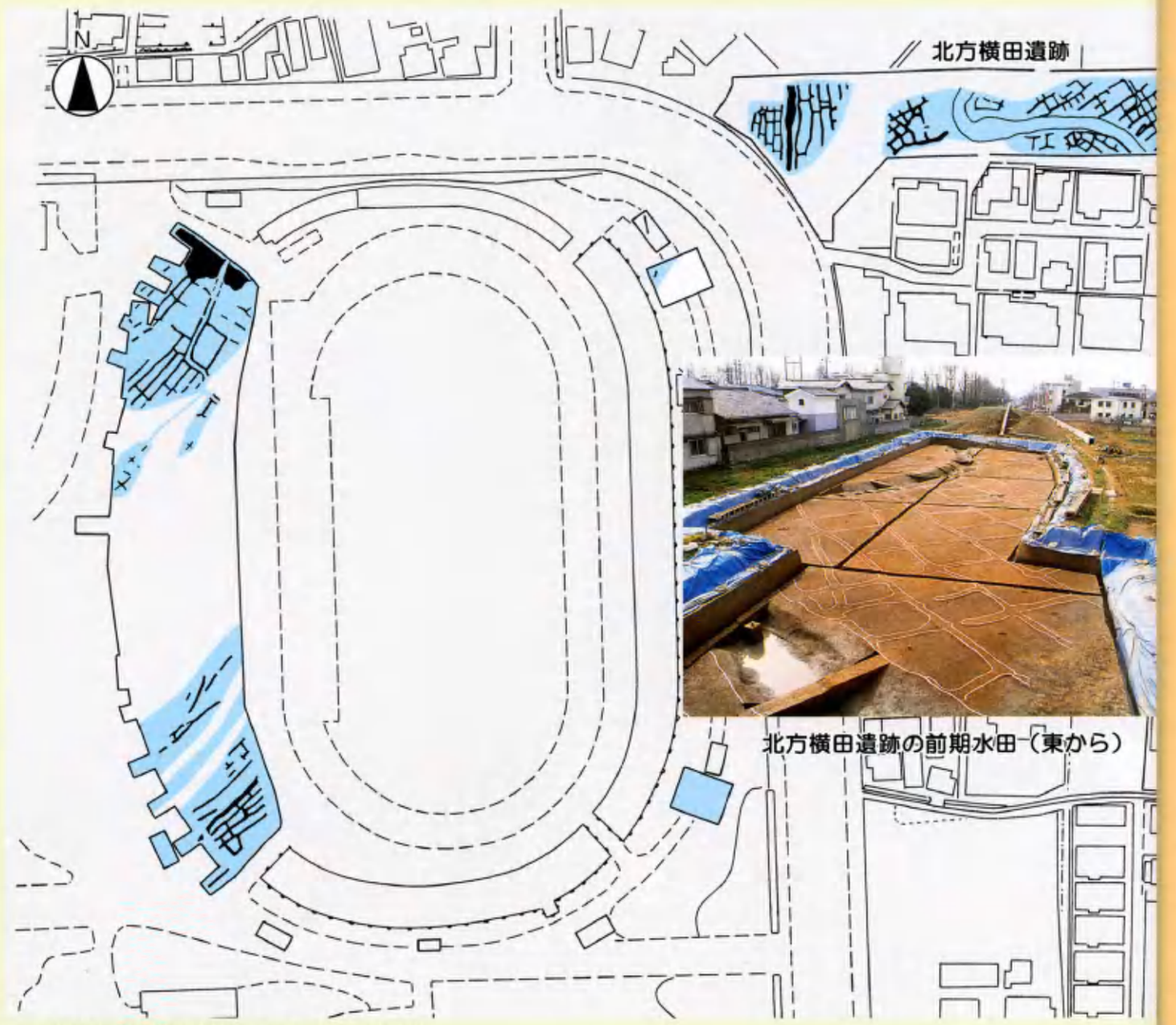
■校外学習

遺跡の調査はできるだけ多く公開します。地元の小・中学生の校外学習にも活用されます。

弥生時代前期

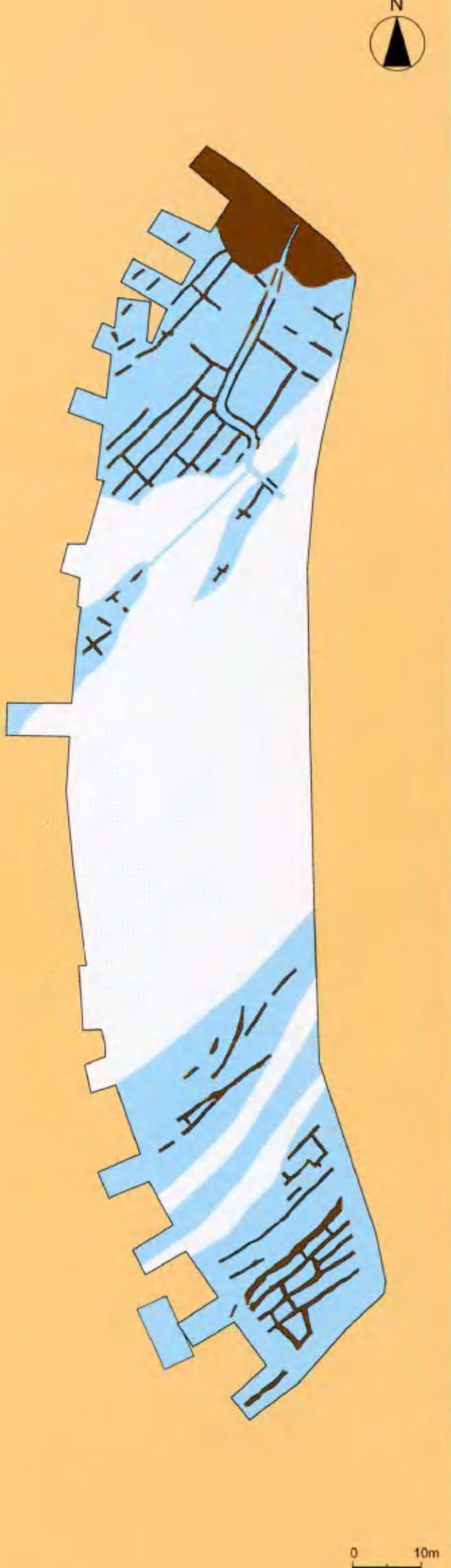
今回の調査では、弥生時代前期の水田遺構が見つかりました。水田は古い地形を利用してつくられているためアゼの間隔が狭く、１枚あたりの大きさが現代のものより小さいことがわかりました。水田に水を引き入れる人工の用水路も作られています。また、通常よりも幅の広いアゼも見つかりました。これは農作業をする際の通り道として利用されたと考えられます。水田の中から稲の収穫に使う石包丁と呼ばれている道具もみつかりました。誰かの落とし物だったのでしょうか。この当時、稲の穂をつむ方法で収穫していたようです。

今回の調査では水田のみが見つかりましたが、周辺では家や倉庫なども見つかっており、この水田を耕した人々のムラがあったこともわかっています。



北方横田遺跡の前期水田（東から）

前期水田の広がり（約1／1,800）



△中央にL字状に見えるのが用水路と考えられる溝です。

△人と比べて、水田の大きさはどうですか？

△アゼの検出

△一部後世の溝で失われていますが、本来は一面に水田が広がっていたと考えられます。

弥生時代中期

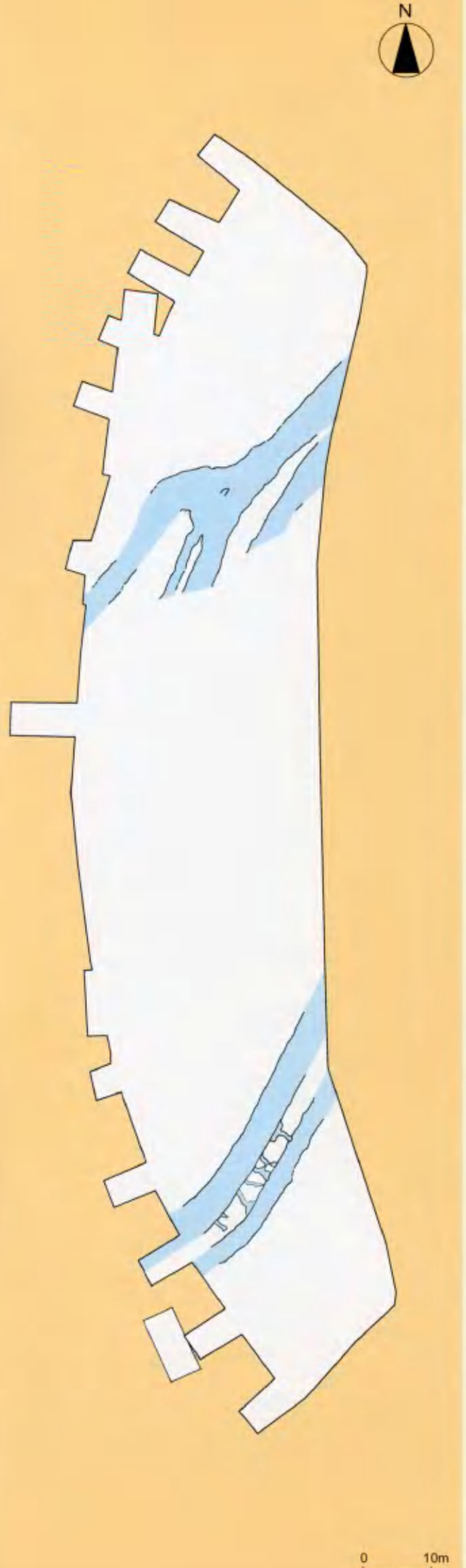
弥生時代前期にみられた広大な水田は、その後、土砂の堆積で埋まってしまったようです。弥生時代中期では、この場所に人の住んだ形跡はあまり認められませんでしたが、右の調査区に示すように、北東から南西方向に流れる溝を発見しました。

溝は幅2.5～4mで、深さは人の背丈ほどあります。溝の掘削は、土を掘る人、運ぶ人など大勢の人が関わった大土木工事であったに違いありません。人々を動かした地域の有力者の存在がうかがわれます。この時代、鉄を利用した道具も伝えられていましたが、まだ貴重品でした。現在のように立派な道具や機械もなかったこの時代、人々を大土木工事にかりたてた理由はいったい何だったのでしょうか。

これらの溝は堆積していた土から判断すると、比較的短期間に埋まってしまったようです。大洪水でも襲ってきたのでしょうか。その後、この地区には次のページにみられるような河川が出現し、人々の定着がはじまります。

●作業風景

溝の中から発見された壺（右）と木器（上）です。木器は両端を加工してあります。



溝の途中には水をためる池のようなものがありました。

ベルトコンベアーや大型の機械もありますが、溝を掘るのは今も昔も人の力です。

この溝はいったいどこにつづくのでしょうか。誰が管理していたのでしょうか？

弥生時代後期

弥生時代後期になると、集落のそばの川や湿地が埋まり、全体に安定した平らな地形が広がってきます。そして、その平地を舞台に人々の生活が営まれるようになり、津島のムラはこれまでにないにぎわいを見せ始めます。

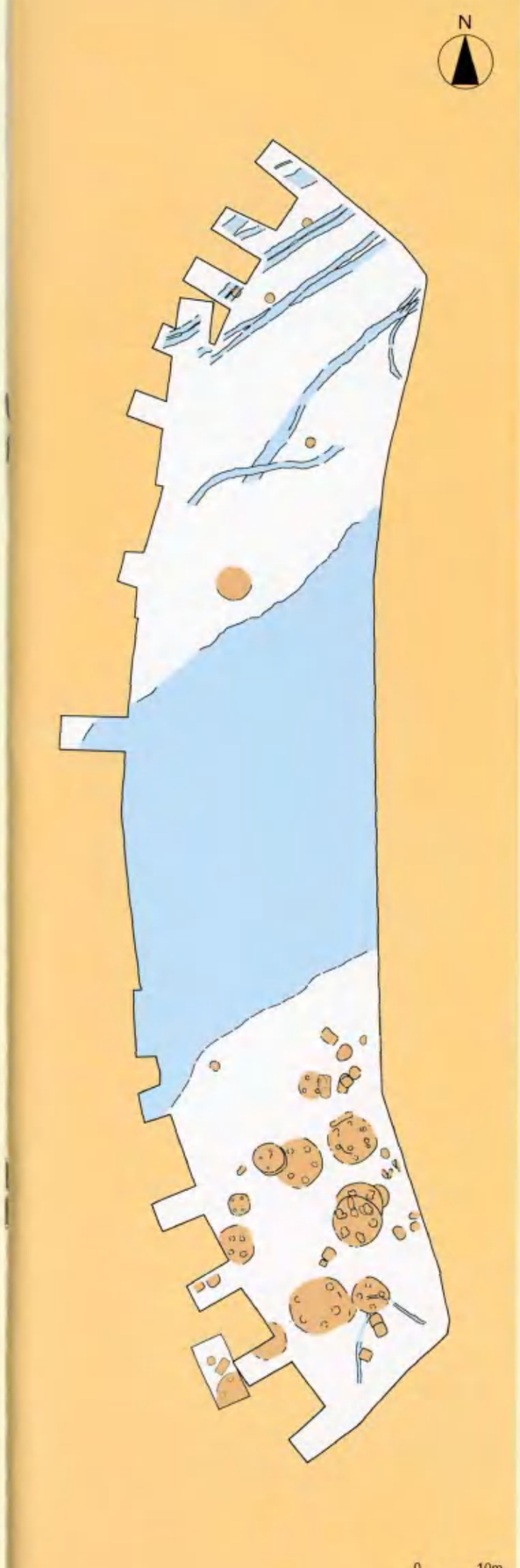
右ページの図を見ると、真ん中に大きな川が流れ、その両側にムラが広がっている様子がわかります。特に南側では、竪穴住居や貯蔵穴などがたくさん見つかっており、当時のムラの姿をよく残しています。一方、北側は後世の造成で土地がけずられたようで、深く掘られた溝や貯蔵穴の底しか残っていませんでした。

また川の中からは、大量の土器のほかに、付近から流れてきたと思われる木製品が多量に出土しました。この中には高床建物の部材である柱やはしごなどもあり、当時の建築技術を知るうえで、貴重な資料となりました。さらに、鍬・えぶり・代掻きなどの農耕具からは、田んぼで農作業に励む当時の人々の息づかいが伝わってくるようです。

ただ、今回の調査では当時の水田そのものは見つかっていません。地形の変化とともに、水田をつくる場所も徐々に移動していったのでしょう。

■竪穴住居の調査の様子

住居の大きさを人と比べてみましょう。



■用水路

手前の溝は深く掘られています。当時の用水路かもしれません。

■溝と貯蔵穴

白線で示したのが当時の溝です。地形に沿って、北東から南西に流れています。円は貯蔵穴です。

■ムラの全景

たくさんの住居が切り合っています。円形の住居が弥生後期のものです。

■建て替えられた住居

円形の住居が重なり合っています。作られた順番がわかりますか？

■竪穴住居の想像図

住居跡からは平面形と大きさはわかりますが、上屋までは残らないのが普通です。柱穴の配置や、他遺跡での例などを参考に、柱と屋根を加えて復元してみました。

■大きな家と小さな家

大小さまざまな住居があります。それぞれどんな人たちが住んでいたのでしょうか。建物の大きさは当時の身分の差を反映しているのでしょうか。

■１ＬＤＫ？

住居面積１８㎡（約１１畳）です。津島遺跡では平均的な大きさの家です。はたして何人が生活していたのでしょうか。

■貯蔵穴（ちょぞうけつ）

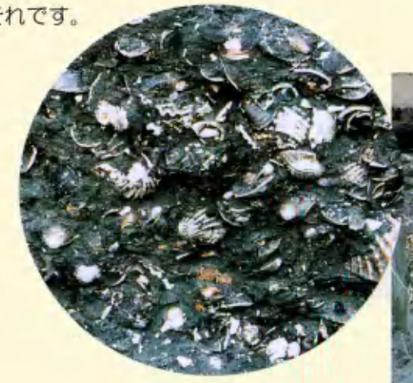
ものを貯えておくための穴です。本来はもっと深かったのが、上部のほとんどが削られて浅くなっています。穴の底には、たくさんの土器が残されていました。

■土壌（どじょう）

この土壌からは、炭化して真っ黒になったお米が大量に出土しました。一番下の黒い層がそれです。

■炭化米（たんかまい）

これが出土した炭化米です。今のお米と比べてどうですか？　形はよく似ています。



■貝塚（かいづか）

川岸の洗い場付近には、ハイガイ・シジミ・カキなどの貝殻がたくさん捨てられていました。

■さまざまな木製品

河川の跡からは、水漬けになって腐食をまぬがれた木製品が大量に出土しました。内容は、農耕具、容器、建築部材など多岐にわたります。

細い木材をひもで縛って、平行または格子状に組んだものが何点か出土しました。ひもには植物のつるを使っています。

刻骨（こっこつ） シカの角に刻み目を入れた楽器の一種と考えられます。

代掻き？（しろか） 田んぼをならす道具です。

蹴放し（けはな） 扉の敷居と考えられます。

えぶり 田んぼをならす道具です。

作業風景 北側斜面に捨てられた土器・木器・建築部材の出土状況。

建築部材 木と木を組んでいます。

装飾板（そうしょくいた） 円形の文様が描かれています。

鍬（くわ） ナスビに似た形です。

土器の置き台

竪杵（たてぎね）

鍬の柄（くわえ）

長い間土に埋まっていた木材はもろくなっています。作業は慎重の上にも慎重に。

部材同士を組み合わせるための「ほぞ穴」があちこちに見られます。

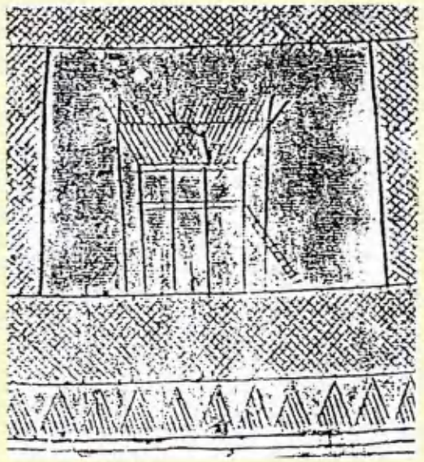
■建築部材（ざい）の出土状況

多数の建築部材が、折り重なるようにして出土したところです。柱材のほか、右側に「すだれ状部材」、左側に「はしご」が見えます。組み合わせると高床の建物になると思われます。

柱の中には、組み合わせるために先端を加工したものもあります。

木材のほか、草状のものも多く出土しました。屋根や壁に葺かれていたのでしょうか？

この「すだれ」に似た部材は、建物の壁か屋根の骨組みかも知れません。



銅鐸（どうたく）に描かれた高床建物
（伝香川県出土銅鐸）

高床建物の想像図

古墳時代

古墳時代には多くの家（竪穴住居）が見つかりました。弥生時代後期に引き続いて、川の両岸にムラが広がっていたことがわかります。

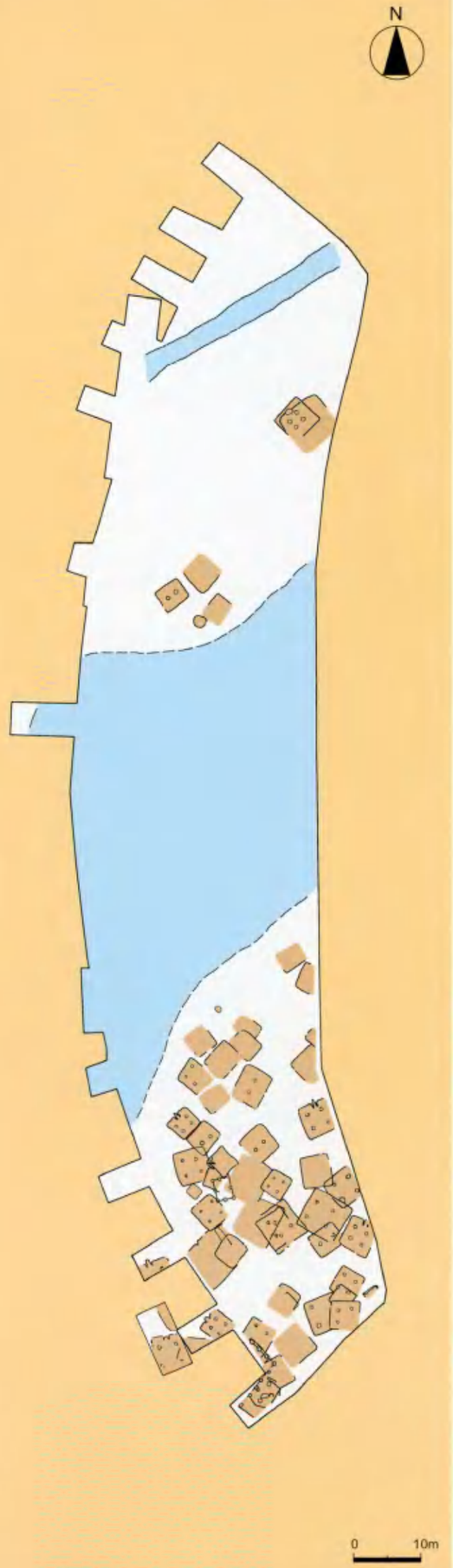
川のそばには、シジミや近くの海から採ってきて食べたハイガイ・カキの殻などをたくさん捨てた場所もありました。このムラの真ん中を流れる川は、普段は歩いて渡っていくことができる深さであったと考えられます。

このムラでは、水に関するお祀りを頻繁にしていることもわかりました。川辺に壊れていない土器を重ねたり、ミニチュアの土器を置いています。古くなった井戸を埋める時にも同じく壊れていない土器を入れてお供えをしています。土器の中にはお酒などを入れていたのかも知れません。川や水に対してのおそれと、大切にする気持ちがこのようなお祀りに表れているのでしょう。

古墳時代になると家の形が弥生時代の円形であったものから、方形に変化していきます。また古墳時代中期になると朝鮮半島から様々な知識や物が日本に伝えられ、家の中にカマドが作られたり、須恵器と呼ばれる硬い土器が使用されるようになったりします。このように生活様式に大きな変化があったことがわかります。

■古墳時代の住居（上空、東から）

何軒もの家が重なっている状況がよくわかります。
しかし、これがすべてではありませんでした。



■竪穴住居の重複状況

同一面で４～６世紀の住居が検出されました。この写真には合計１３軒の住居がみられます。

■竪穴住居No.６５

２本の柱からなる住居です。人の入っているのが柱穴です。

■調査区

これで古墳時代の全ての調査が終わりました。

■前期の家

本来１ｍ近い深さをもつこの住居も上面のほとんどが削りとられてしまっています。また、東側も５世紀代の２軒の住居によって削られてなくなっていますが、一辺５ｍをはかる正方形の住居でした。

■中期の家

一辺5mの正方形の住居です。中央の4本の柱穴以外に南側の壁際には大きな穴がありました。

●カマド付きの家想像図

■後期の家

津島遺跡では５世紀の終わり頃からカマド付きの家が見られるようになります。この住居ではカマドが北側の中央部にしっかりと造り付けられていました。

■「L」字形の煙道を持つ家

多くの家のカマドはまっすぐに外にのびる煙道が付きますが、これは壁に沿った煙道を持つ、珍しい構造のものです。

■井戸

平面の直径１.６m、深さ１.４mの素掘りの井戸です。底には井戸のまつりに使用された甕が6点、上下2段に置かれていました。

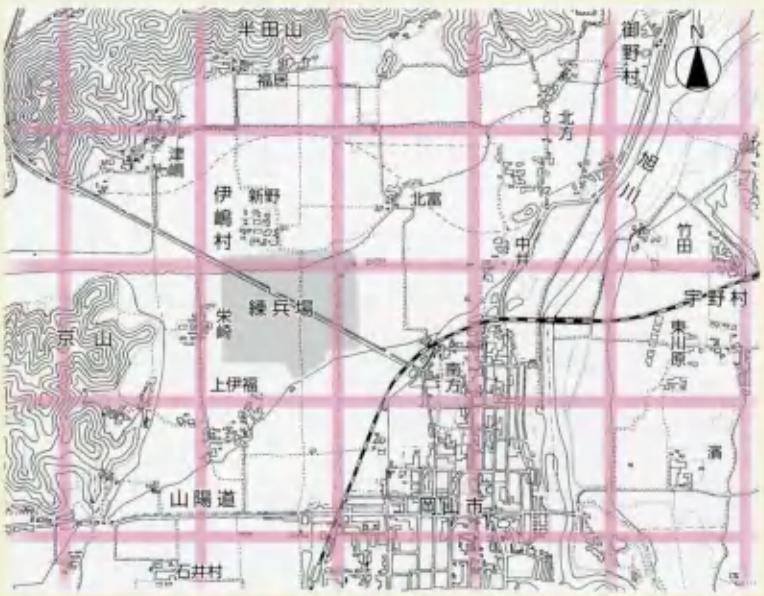
■土器溜まり

川辺に壊れた土器をたくさん捨てていますが、ここでは完形の土器にまじって、ミニチュアの土器が多くみられました。

古代～近世

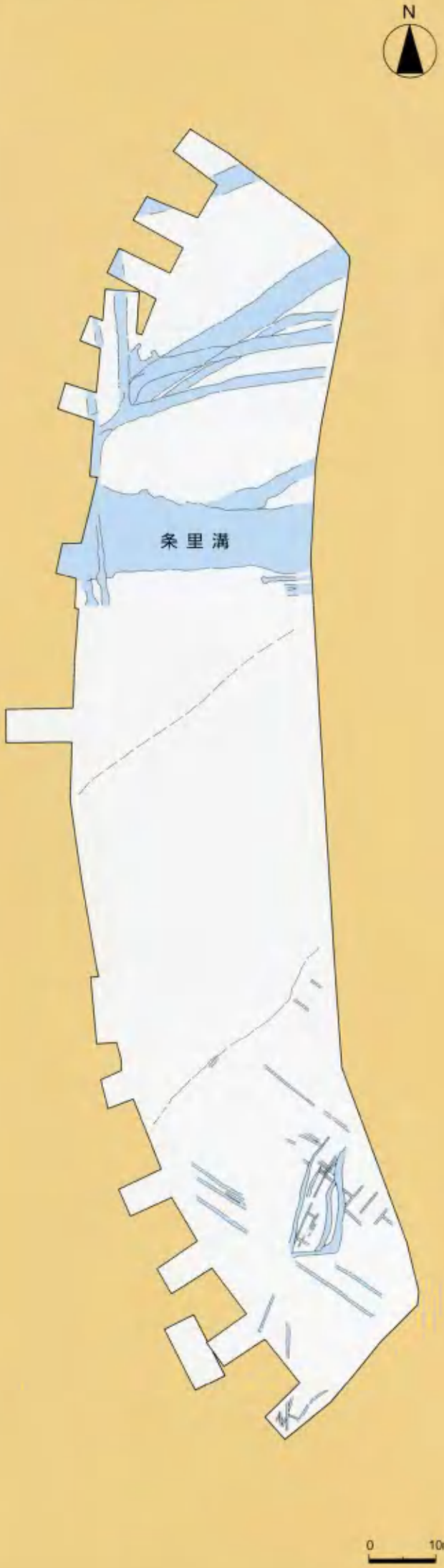
古代以降には条里制と呼ばれる地割り制度に基づいた大規模な区画整備が行われました。それ以前の地割は地形に沿った自然な方向のものでしたが、条里制の施行後は方位に合わせて基盤の目のように区画されました。津島遺跡でもその区画に合った東西方向の溝が発掘されました。

また、遺跡の大部分にはその後明治に至るまで水田の土が厚くたまっており、当時この一帯が水田として利用されたことを物語っています。



■条里の区画が良く残っている図（1／40,000）
（大日本帝国陸地測量部明治31年発行「御野村」改変）
条里の区画線は『岡山縣農地史』（永山卯三郎著1979年）から作図

△条里溝作業風景



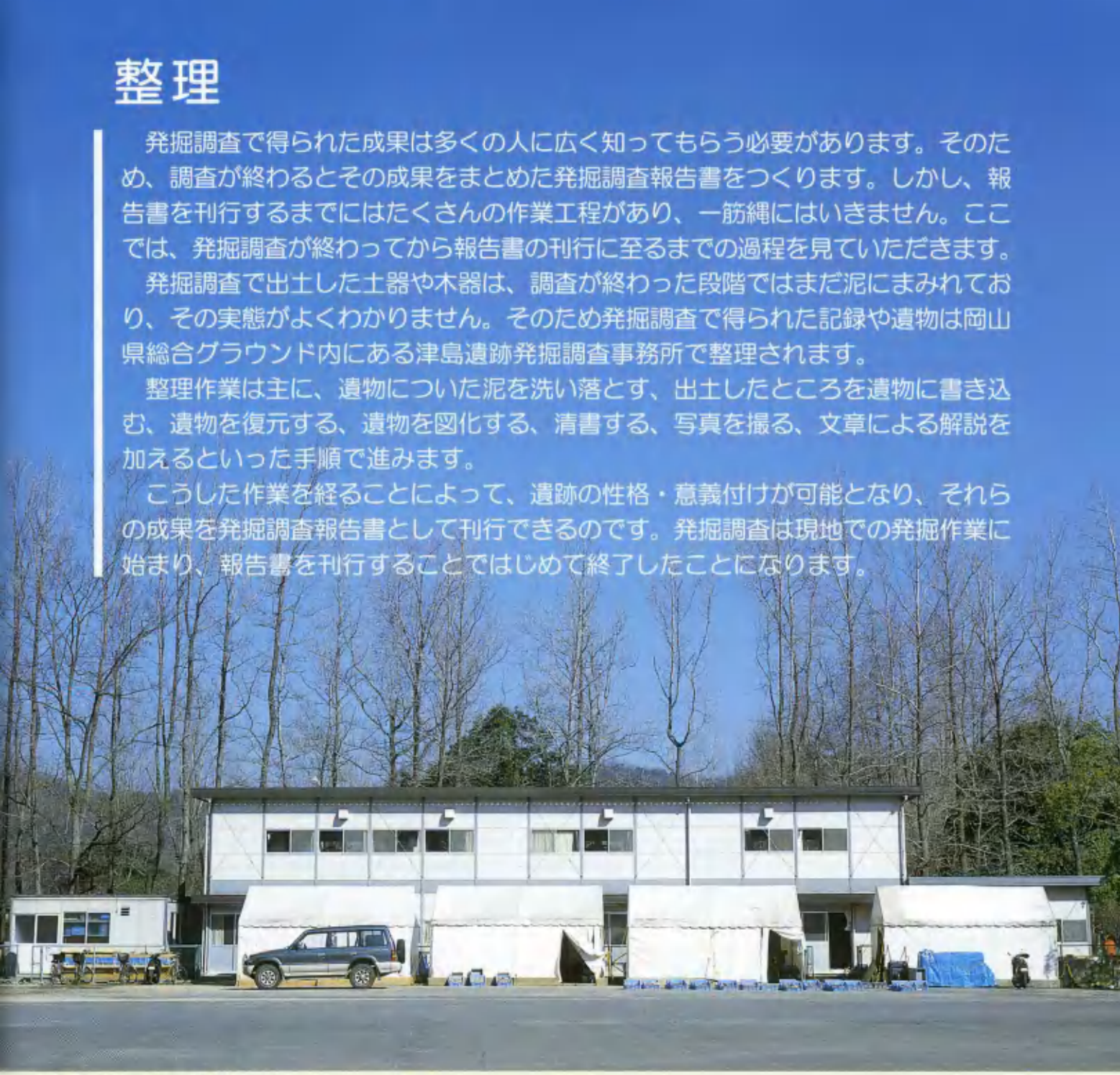
整理

発掘調査で得られた成果は多くの人に広く知ってもらう必要があります。そのため、調査が終わるとその成果をまとめた発掘調査報告書をつくります。しかし、報告書を刊行するまでにはたくさんの作業工程があり、一筋縄にはいきません。ここでは、発掘調査が終わってから報告書の刊行に至るまでの過程を見ていただきます。

発掘調査で出土した土器や木器は、調査が終わった段階ではまだ泥にまみれており、その実態がよくわかりません。そのため発掘調査で得られた記録や遺物は岡山県総合グラウンド内にある津島遺跡発掘調査事務所で整理されます。

整理作業は主に、遺物についた泥を洗い落とす、出土したところを遺物に書き込む、遺物を復元する、遺物を図化する、清書する、写真を撮る、文章による解説を加えるといった手順で進みます。

こうした作業を経ることによって、遺跡の性格・意義付けが可能となり、それらの成果を発掘調査報告書として刊行できるのです。発掘調査は現地での発掘作業に始まり、報告書を刊行することではじめて終了したことになります。



津島遺跡発掘調査事務所

■遺物の収蔵状況

調査で出土した遺物が収蔵されています。

土器洗い

土器洗い

■土器の洗浄

出土した土器には泥がついているので、まず丁寧に泥を洗い流します。土器の状態によって、手洗いとコンプレッサー洗いを使い分けます。

木器洗い

■木器の洗浄

約１８００年間土の中にあった木器は、かろうじて姿を保っていますが、大変もろくなっています。そのため、より慎重な洗浄作業が要求されます。

■注記

洗い終わった土器には乾燥後、遺跡名・遺構名・出土年月日などが分かるように筆と機械を使って直接書き込みを行います。

■復元

注記作業が終了した後、土器の接合作業に入ります。遺跡で出土する土器などのほとんどが割れているため、本来の姿にもどすには時間がかかります。どうしても足りない部分は石膏で補って復元します。

■遺物写真

復元の後、１点１点写真撮影します。

土器の実測

木器の実測

■実測・清書

復元の後、遺物の図化作業を行い、その特徴を詳細に記録します。また、図化した記録は清書作業を経て、報告書に掲載されます。

清書（トレース）

■原稿執筆

これまでの作業で得られた成果に文章による解説を加えて発掘調査報告書を作成します。

津島遺跡を探る2

～岡山県陸上競技場改修に伴う発掘調査の記録～

編　集　岡山県古代吉備文化財センター

〒701-0136
岡山市西花尻1325-3
電話(086)293-3211
FAX(086)293-0142
http://www.pref.okayama.jp/
kyoiku/kodai/kodaik.htm

発　行　岡山県教育委員会

〒700-8570
岡山市内山下2-4-6

発行年　2001年3月

（昭和23年極東米軍撮影　国土地理院の許可を得て掲載）